

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

小熊英二著

## 『1968』(上下)

(2009年 新曜社)

### 説明しがたい「1968年」を再検証

「1968年」といって、それだけですぐわかる人と、まったくわからない人が半々くらいの時代となった。40年も昔のことを覚えている人は、それほど多くない。1968年とは学園紛争が頻発した年で、その頂点は東大安田講堂をめぐる攻防戦で、その映像はテレビを通じて全国に放映された。

この本の上巻の表紙にはヘルメットをかぶった女子学生の写真が載っている。ヘルメットからのぞいている横顔は、無邪気なまでにあどけない。これほどの幼さを残した少女がどうしていかめしいヘルメットをかぶったのか。これまで「あれはいったい何だったのか」という問いがいくたびも繰り返されてきた。しかし明快に説明してくれる人に出会ったことがない。先日も当時石を投げたことで有名な、ある大学の副学長と会い、話が1968年のことに及んだ。その当時筆者はすでに学生は終えていたので、当時の後輩たちの興奮ぶりが理解できなかった。だから「あれは子ども時代に戦争ごっこをやらなかったからだ」と勝手に決め込んでいた。われわれ世代は戦争ごっこ以外の遊びをしたことがなかった。昭和一桁世代とはそういう時代だった。

この程度の感想しかもたない人間との対話だから、かつて闘士だった副学長も話しくかったのだろう。話は核心に及ぶことなく、双方とも消化不良で終わった。この話が示すように、これまで様々な人々が1968年を語り、記録してきた。しかしああいった事件には、もともとさまざまな現場がある。一人の人間はある体験をしていたのだろうが、当人がいた現場から一本隔てた路地では別なことが起きていたはずである。つまりたとえ事件の渦中にいたといっても、各個人の経験が覆える範囲は限られている。

だから40年も経ってから事件を再構成することは容



易なことではない。1964年生まれの著者は、その当時4歳の幼児だった。その著者が集められるだけの資料を集めてこの作業に挑戦した。その結果が上下合わせて2000ページ、厚さにして11cm、秤にかけると2850gの大作となった。

### 未熟な反乱は生きづらさの端緒

著者の結論は「彼らの反乱は政治運動としては、およそ未熟だった」という一文に要約されている。そして「現代的な生きづらさの端緒が出現し、若者がそれを嗅ぎ取った反応」だったという。現代の若者は不登校、自傷行為、摂食障害、空虚感、閉塞感の圧力釜に閉じ込められているというが、その端緒があ時代の若者の反乱に頭を出していたのだという。ネットでみると、あれは政治運動ではなく「表現」だったのだといったコメントが舞っている。さっそくこうした「総括」をめぐる様々な批評が飛び交っているが、およそ歴史体験はすべての人間にとって個性的である。映画「光の雨」(小説のほうではない)には、「お前たち。それで革命戦士が演じられると思っているのか」と怒る監督と、「監督。革命戦士って何ですか?」と怪訝な表情で問い直す現代の20歳代の俳優とのすれ違いが描かれている。「監督。あなたたち世代同士では、生き生きとあの紛争時代を語るのに、どうしてわれわれにはそれを語ってくれないのですか」と叫ぶ場面が出てくる。結局この映画では監督は蒸発してしまい、後に残されたメイキング製作者と若い俳優たちとが、仕方なく映画を完成させる筋になっている。

誰しも20歳代の胸のうちは、語りきれない。後に残るのは、その行動だけである。どうして石を投げたのかと問われても語りきれないものではないのだろう。だから歴史は後世の人々の評価に任せるしかない。後世の評価は間違っていることもあるだろう。しかしそれで後世の人々が何かを理解するとすれば、それで本望と思うべきだろう。